

### 第3章 全国ブランドへの道のり

「焼柿」から「市田柿」へと改称し、各地の中央市場へ進出した大正時代。戦争中に行われた皇室や靖国神社への献上は、市田柿の名前を全国へ広めるきっかけとなりました。戦後は、栽培・加工の技術も向上し、機械化で農家の規模拡張も進みました。長野県初の地域ブランドに認定され、健康食品としても注目が集まっています。



飯田市三穂地区に焼柿を広めた功労者  
下市田から持参した柿の木は、今も現役

#### 宮沢熊太郎

●みやざわくまたろう

宮沢熊太郎さんは、福澤利喜三郎さん、伝蔵さん親子が柿の苗木の保管に室を借りていたと伝えられる佐々木半左衛門の次男として江戸時代末期の元治元年（一八六四）に誕生しました。

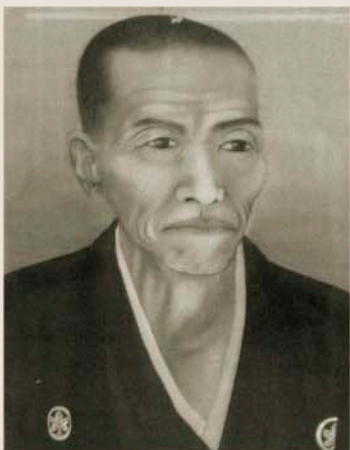
熊太郎さんが、三穂村（現在の飯田市三穂地区）の宮沢家に養子に行ったのは明治三十年（一八九七）頃。『三穂村史』によると、大正十二年（一九二三）頃に、下市田から焼柿の苗木を持ってきて宮沢家の墓所に植えたといわれています。

焼柿（市田柿）の美味しさが村中に広ま



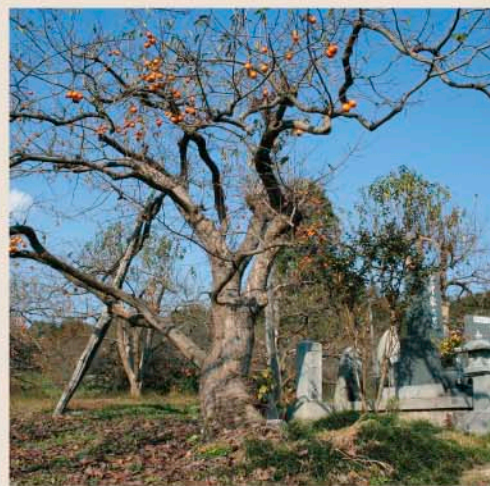
酒井安【1888~1973】

安さんが書いた文章には、初めての出荷に  
関して、「：下市田壮年団役員会で話し合  
い「これだけ名声が高くなったので何とかし  
て当村名産として天下に唱導して」との意  
見の一致をみた。」、また「送り先は、東京  
の神田万惣青果店二〇〇箱、名古屋青果  
市場二〇〇箱、大阪全店二〇〇箱。」、  
「予想外の安値で：（略）：結局骨折り損の結  
果となった。」などと残されています。  
自らは柿やリンゴなどの果樹栽培に早く  
から取り組み、摘果や施肥、病虫害の研究  
を通じて、上沼正雄さんらとともに市田柿  
の改良にも力を入れました。昭和四年（  
一九二九）二月に市田小学校で開かれた果樹  
普及講演・講習会（講師：橋都正農夫ほか）  
には村助役として参加し、果樹栽培の将来  
性を力強く訴えたといえます。



宮沢熊太郎【1864~1949】

ると、洪柿（立石柿）を台木にして接ぐ人  
が増え始めました。接ぎ木作業を担ったのは、  
熊太郎さんの甥の宮沢敬信さんです。熊太郎  
さんの妻・ひささんの弟・利一さんと、熊太郎  
さんの妹が結婚した縁もあり、敬信さんと熊  
太郎さんは仲がよかったと想像できます。  
市田柿は、立石柿よりも実がひと回り大  
きく甘みが強いのが特徴です。三穂地区全  
域で市田柿が作られるようになると、家々  
の軒先にも真っ赤な柿すだれが見られるよう  
になり、秋の風物詩として定着していきま  
した。



熊太郎さんが持参したという市田柿。波柿を台木に接が  
れていて、胴回りは170cmもある